

# 友だちといっしょにいることを楽しみにする子

城 上 陽 子

## はじめに

K男は、小学部より連絡入学し、現在は中学部3年生である。小学部での当面する課題は「落ち着いて行動する」ことであり、毎年の担任の交代やクラス構成の変化に対応できない状態から、約1年かけて次第に落ち着いてくるという状態を繰り返していた。担任との強い人間関係でコミュニケーションが取れ、K男も大人に相手をしてもらうことで安定が図れていた。しかし、物や習慣へのこだわりの強さは集団への参加を拒否し、他の場所への逃避、指咬みの自傷行為等となり、落ち着いて友だちと過ごす時間はごく短く、個人的な作業をしつつ同じ場所にいることができるという状況であった。中学部では、入学当初は学部の生活に慣れることが大きな課題であった。視覚的優位を生かしての文字カードで見通しがもてるようになり、友だちと一緒に場の移動ができるようになった。この『友だちと一緒に』に行動することが、自己（大人との接触も含めて）から他者（友だち）への世界へと踏み出せたきっかけであったように思う。

## 1 プロフィール

### (1) 生育歴

- ・昭和57年1月1日生 14歳10か月 中学部3年 男子
- ・自閉症

### (2) 諸検査による実態

- ・知能検査 WISC-R (言語性)45以下 (動作性)68 (IQ)52
- ・S-M社会生活能力検査 (SA)4歳0か月  
作業の領域が高いのに比べ、意志交換・集団参加・自己統制の領域が低い。
- ・自分づくりの段階  
友だちの様子を見て何をしたら良いか気づいて、活動することができる。

### (3) 楽しんでいる姿の特性

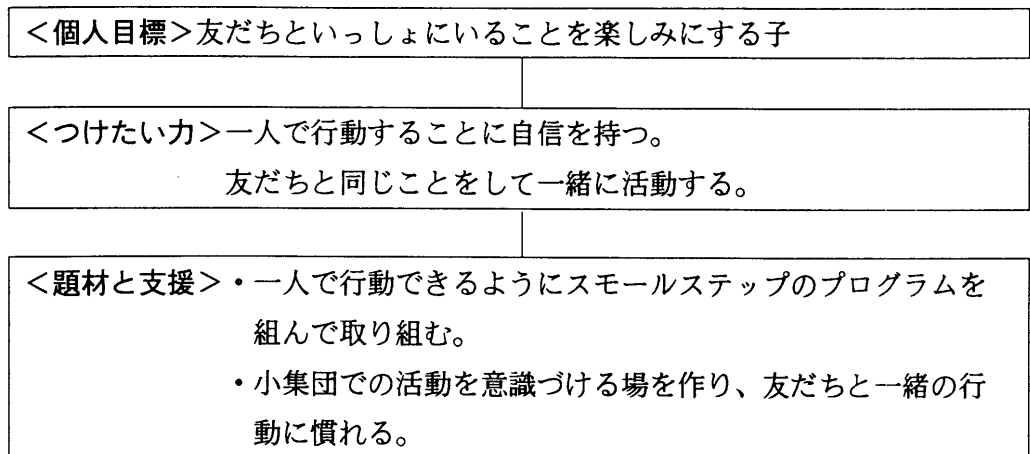
- ・触覚、感覚的接触で自分のこだわりのある物に触り、位置を確認して満足する。
- ・大人に相手をしてもらって遊び満足している。

## 2 取り組みの構想

### (1) 指導仮説

わずかな環境の変化に敏感に反応し、集会などにおいて人数の多少に関係なく参観者や外来者がまじると落ち着かず、突然大声を出したり、跳び上がったり、その場から離れようとしたりするK男である。しかし、2年生で「友だちと仲よくする」や「友だちと一緒に勉強する」と友だちを意識した目標をあげ始めてから、友だちとの学校生活を穏やかに過ごせる時間が少しずつ見え始めてきた。この状況から、友だちと一緒にいる

ことを楽しみにする行動が、どこかに見えはしないかと期待している。



いつも指導者の目（保護者も含めて）のなかで行動するのではなく、自分一人を意識して行動する機会をわざと作り、できることで自分の行動に自信を持つ。これがまた友だちの中にまじっても、大きな不安を感じず、活動することの楽しさを産み出す基になるのではなかろうか。

## (2) 指導方針

- ①一人で行動できることに自信が持てるように適切な場を設定する。
- ②学級集団を意識した場を作り、友だちと一緒に行動する。

## 3 指導の実際

### <清掃における指導>

指導者がついていなければ、自分の行きたい所に勝手にいってしまうK男であった。2年生の11月に外掃除をしその後始末で、校舎の向かい側の草捨て場に学級の友だちと一緒に行くようにしむけた。担任はついて行かない顔をして見送り、そと様子を観察した。

場所がかなり離れたところであり、途中にK男がよくのぞきに行くプールもあり、友だちから離れてしまうのではという予想があった。ところが、一緒に教室までちゃんと帰って来ることができた。これをきっかけに、学級の友だちと一緒に行動する機会を持てるように心がけてきた。仲間意識というのか、学級の友だちの中にまじっていると安心感があるのか、場所の移動やあまりなじみのない施設などでも大騒ぎをしなくてもよくなった。

### <朝の会における指導>

学級の中ではなるべく一人ずつ交代でする場面を作り、友だち一人ひとりのする活動を順に見てから、K男もするようしむけた。見ることで何をすることが分かり、自分もすることのできる自信につながってきている。朝の会の司会は、1・2年の時と同じスタイルではなく、3年生になってからは少し複雑なものにした。友だちの様子を見ているうちに、その変化に対応しようとする態度が見られ、少しせっかちなS男の援助で司会を進めることができるようになった。

### <遊びの時間の過ごし方>

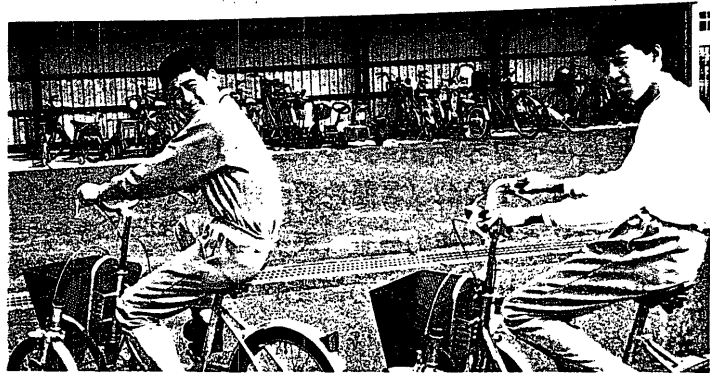
こだわりの強いK男は、遊びも、積み木・かるた・紙芝居等の触感的な満足感にとらわれて、それらの特定な物に触らずにはおられない状況を作り出してしまっていた。このような内に向かうエネルギーを外に向ける、なるべくなら身体の運動になる適当な材料を捜していた。

中学部の活発な生徒は、天候の良い季節には戸外での自転車乗りを楽しんでいた。勢いよくペダルをこぐ姿は見ていても気持ちよかった。そこで、K男に自転車に乗ることを考えて見ることにした。自転車のサドルに座るのは嫌がらなかったのも、とりあえず後ろの荷台を支えてやると、ペダルを踏んで前進した。しかし、バランス良く自転車に乗ることはできそうになかった。ころ付きの自転車に乗ると、ハンドルが低く膝がつかえたけれども、校舎を一周した。そのうちに、付き添わなくても一人で回ってくるようになった。次第に友だちにまじって自転車乗りをするようになり、声かけだけで戸外に出かけ、友だちと一緒に片づけて教室に入ってくるようになった。K男の心に、友だちと遊ぶ楽しさが少し見えてきたように思った。最近、大人用の前輪が複輪の自転車を2台購入し、バランスを取るのが苦手な生徒も自転車

乗りが楽しめるようになった。K男に「S君と一緒に自転車に乗ったら」と声をかけると、「にっ」と笑って一緒に行くようになった。

#### <バスの乗り換え・通学指導>

K男はバス通学であるが、乗り換えががあるため自力通学は難しいと思われていた。しかし、可能なら、自力通学をさせたい保護者の気持ちを確かめ、2年生の6月より、バスの乗り換えをして帰宅できるように取り組んできた。これはK男の親離れであり、K男を信じて待てる親や教師になることであった。母親、時には教師もずっと陰から乗り換えを見守ってきたが、遂に3年生の11月から、乗り換えを一人でさせ、母親は家でK男の帰宅を待つことにした。時々下車のバス停から乗り越すこともあるけれども、このことはK男のとても大きい自信になっている。これがつながって、母親がついていなくても、朝のバスターミナルで友だちと一緒に座ってバスが待てるようになっている。



S男と一緒に自転車に乗っているK男

#### 4 考察と今後の課題

こだわりの強いK男は自分を受け入れてくれる人（大人）に相手をしてもらいたがり、甘えて身体にもたれかかったり、思うようにならないとパニックを起こしたりすることが多かった。しかし、自転車乗りのように、援助なしで自分の力のみで運動でき、友だちの中で行動できることに自信を持ち始めると、友だちと一緒に活動することが楽しくなってきた。つまり、自分一人のできることの範囲を広げていく機会を一つでも多く見つけて、そのことに取り組んでいくことで、生活を楽しむことを増やしていく。今後も、保護者との連携のもとに生活の場を広げていけるような支援の工夫や方法を考えていきたい。